

漢詩の教材研究

―対比の視点から杜甫「絶句」を読む―

西 一 夫

一 はじめに

中学校国語教科書に取り上げられている漢詩教材の一つに杜甫の「絶句」がある。

絶句 杜甫

江は碧にして鳥は逾よ白く

山は青くして花は然えんと欲す

今春看す又過ぐ

何れの日かは是れ帰年ならん

光村図書『国語2』では、訓読文を上段に、訓点を附した原文を下段に配した体裁を取り、これに石川忠久氏の解説・鑑賞文が附されて教材化がおこなわれている。

本ノートでは、この詩を取り上げて教材研究の一端を示す。

二 構成美

詩全体の構成について石川氏は、解説・鑑賞文のなかで、次のように整理している。

この詩は、杜甫が成都にいたときの作です。うち続く戦乱を避けて、友人を頼りに故地へ来たのです。

まず、この地の美しい風景が前半二句に描かれます。

(中略)後半では、この風景を前にした作者の思いが歌われます。

つまり、五言絶句の四句を前半二句と後半二句とに分けているのである。くわえて前半二句は対句として整えられた表現であることにも注意を向けており、松浦友久氏が「対句」の名手、また「律詩」の名手にふさわしく、対句の形で愛誦されるものが多い」(『漢詩―美の存りか―』岩波新書)と述べて本詩の前半二句を例証として取り上げられるように、対句としての構成美に特徴がある。これは「白髮三千丈」李白「秋浦の歌、其の十五」等のように一句で愛される詩句とは受容のあり方が異なり、二句ないし四句で引用する『和漢朗詠集』のような形式に近いと言える。

さらに色彩的に対句を仕上げることから、対句の構成美を際立たせている。色対の「碧・青」「白・然(燃)「

をはじめとして、「江・山」「鳥・花」と言った対比の要素で対句を構成しており、二句十文字のなかで八文字が対句表現に関わる。また、「山は……」が仰角となり、「江は……」が俯角を構成していることから空間的な広がりを持たせる表現ともなっている。あわせて山川の表現に同系色の「碧・青」を用いている点にも留意する必要がある。特に水の色に「碧」を用いている点に関しては、

「碧」なる水の「みどり」は、緑は緑でも深みがかった濃い色調のものであることに間違いはなく、具体的にイメージとなると、やはりあの宝石のエメラルドあたりに落ち着くことになるのだろう。

(向島成美『漢詩のことは』大修館書店)

との指摘は貴重であり、同音異義の漢字学習にも有効である。山を青と表現している点とあわせるならば、山川共に、深い青色系統の色として描かれる。その一方を宝玉に基づく語で表現していることからすれば、春景色の中に蕩々と流れる川の姿を、この上なく美しく好ましく描き出そうとしているのである。色彩語については、民族や個人によって微妙な異なりが生じる。一見誰にでも了解されやすい表現ではあるが、詩人たちが用いている色彩語にさまざまな思いを託しているのであって、慎重な配慮が必要なのである。

みてきたように前半二句は徹底した対句として構成されているのと較べて後半の二句には対句を意識させる要素は全くと言って認められない。石川氏の解説文でも後半二句については、対句表現についての言及は見られない。これほどまでに前半と後半では表現構成に違いが存するのである。対句の有無という観点からすれば、対照的な関係をなしており、前半二句の対句による構成意識の高さと後半二句の対句を使用しない表現構成という対比を見ることができよう。

三 表現美

前節で指摘したような対句表現を中心とした構成美は、形式のみならず、表現にも影響をあたえている。

前半二句の対句による表現は叙景であり、色対による表現効果は「なんとも鮮やかな春景色が浮かびます」と石川氏が述べる通りであろう。対する後半二句では作者杜甫の心情がまとめられ、抒情的な内容となっている。故郷を離れていつ帰ることができるのかもしれない不安な心情を前半の春景色の中で感じているのである。この点も石川氏が「異郷の明るい春景色の中で、悲しみに沈む作者の姿が強く印象づけられ」という。

対句を多用した前半の叙景と対句を用いずに帰郷のか

なわない不安な心情を述べる後半とは、叙景と抒情という対比を持ちながら、さらに美しく明るい春景色の明と、いつかなうともしれない帰郷への思いを、色彩語彙を用いずに語る暗との対比を構成していると理解できよう。特に後半の対句を用いていない表現は、作者の不安で穏やかでない心情を効果的に表現できていると言えるのではないか。

眼前の自然の景色が美しければ美しいほど、自らの思いを叶えられない心情は千々に乱れたと思われる。そうした内に秘めた作者の悲しみを前半と後半の対比を通して一篇の詩に盛り込んでいるのが本詩なのではなからうか。このように捉えると本詩が対比を効果的に用いて作者の心情を表現していることが理解されるだろう。

人間の心情表現を自然美と対比させながら表現する方法は決して新しいものではなからう。本詩と共に教材化されている同時代人李白の「黄鹤楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」においても、前半の叙景と後半の抒情という構成で離別の悲しみを表現しているのである。

普遍性を有すると思われる表現形式に着目するならば、漢詩教材の発展的な学習教材と次のような作品との読み比べも効果的ではなからうか。

四 表現形式の普遍性

うらうらに照れる春日にひばりあがり心悲しもひとりし思へば
(万葉集・四二九二・大伴家持)

「廿五日作歌一首」との題詞が附され、作品と作者に関する注記が存する短歌一首である。この短歌の作者は、杜甫(七一―七七〇)と同時代人である大伴家持(七一八―七八五)である。彼は『万葉集』の編纂に関与するのみならず、奈良時代を代表する歌人の一人である。この作品の前には、次のような短歌二首が記されている。

廿三日依_レ興作歌二首

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕影に鶯鳴くも
(四二九〇)

我が宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕か
(四二九一)

いずれも春の夕刻の景色を詠んでおり、三首合わせて家持の「秀歌」との評価が与えられている歌群でもある(橋本達雄「秀歌三首の発見―窪田空穂顕彰―」『大伴家持作品論 歌』塙書房)。

短歌には漢詩に指摘できるような対句は存しないものの、上三句に詠まれる春のうらかな叙景と下二句の孤独に物思いに耽る歌人の姿が対比的に表現されており、それは明暗の対比をも備えていると言える。表現方法は

詩と歌と異なるものの、発想や構成の類似は二つの作品に共通している。海を隔てて同時代に生きた二人の文人は因らずも異郷にあって望郷の念を類似の表現形式によって詩としたのである。

杜甫は戦乱に明け暮れる中で故郷へ思いを馳せており、家持は越中国守として越中から故郷の平城京へと思いを馳せる。いずれも望郷という共通した発想による作品であることからすれば、同時代に異なる形式の文学作品によって詠まれた内容に普遍性を見出すことができよう。

文学作品の形式美と表現美との両方を把握することで理解はより深まるのであろう。

(にし かずお 信州大学教育学部)